

子どもと笑く、未来のしぐみ

プラン・マンスリー・ サポーター報告書



Plan
プラン・ジャパン

Autumn 2013

2012年7月 → 2013年6月



プラン・ネパール「児童労働」プロジェクト ヘタウダ市での現地視察を終えて

元拓殖大学教授
プラン・ジャパン理事 **長坂寿久氏**



子どもたちから歓迎を受けた長坂理事

このたび、プラン・ジャパンの活動状況を見るためにネパールのマクワンプル郡ヘタウダ市での取り組みを視察させていただきました。プラン・ネパールの児童労働への取り組みは、現場で「HOPEプロジェクト(過酷な状況で働く子どもに『希望』をもたらす)」と名づけられ、日本の皆さまからいただいた寄付金により実施されています。

常に子どもたちへの声掛けを

現地で見た取り組みは、非常に包括的・体系的で感動しました。体制づくりとして自治体の行政職員、議員、商工会議所の人々への研修、雇用主への広報活動などを行っていますが、フィールドでの直接的な取り組みは、まずは子どもの救出活動です。

地元NGO、警察、労働委員会、商工会議所等と救出・監視委員会を設立し、救出への注意深いアプローチ体制を構築しています。また、救出した子どもたちを受け入れる「子どもリソースセンター」を設置しています。労働現場へ救出に行くこともありますが、同時に働く子どもたちにはいつでもいいからリソースセンターに遊びにくるよう、声掛けを常に行っています。



プランが支援する幼稚園に併設された小学校を視察

学校への架け橋となる 「リソースセンター」

センターでは救出した子どもの心理社会的カウンセリングのみならず、両親(家族)のカウンセリング、雇用主へのオリエンテーションを行います。リソースセンターでは、子どもたちは遊んだり、休憩をしたり、本を読んだり、スポーツをしたり。入浴、洗濯などもでき、精神的リハビリの場となっています。

センターの役割で重要なのは教育です。正規の学校に入学できるよう、補習教育プログラムを実施しています。礼儀などを含む「ライフスキル教育」や人権教育なども行っています。こうしてリソースセンターの子どもが多くが小学校へ正規入学していきます。

大人の社会への発言の場 「子どもクラブ」

もうひとつの重要な取り組みが、「子どもクラブ」の運営です。17~25人の子どもたちがひとつのクラブに所属し、自分たちで運営しています。「子どもクラブ」は同じ境遇の子どもたち自身が助け合うリハビリの場、そして人権教育の場であり、大人の社会への発言の場としても大きな効果をあげています。子どもたちは自分たちの意見として大人たち(政府・行政や商工会など)へ発言します。13~15歳という若さで親が決めた相手と「早すぎる結婚」をさせられる問題も、子

どもたち同士の話し合いによる説得の方が効果は高いのです。

職業訓練プログラムの提供 そして自立へ——

子どもたちには、15歳以上になると職業訓練プログラムを提供します。ここでの訓練を通して起業していくケース



リソースセンター(右ページ参照)の子どもたち

も多くあります。また、貯蓄奨励制度が設けられており、成人のみならず働きながら通学している子どもたちも加入し、貯蓄を通して自立精神を培っていきます。帳簿付けや、貯蓄の適切な運営への研修・指導も同時に行っています。

このプロジェクトは全国各地で実施しているわけではなく、現在は資金規模の限界から、少数の特定地域での取り組みに限定されています。NGO活動として、先進国からの資金規模が救われる子どもたちの数を決定しているという事実と直面し、何とも言えぬ恐ろしさを感じるとともに、私たちの寄付の重要性和必要性をあらためて痛感しました。

今回の視察では、訪問中に何人かの子どもたちとじっくり話す機会がありました。瞳がキラキラ輝き、美しくかわいらしい子どもたちですが、話の途中で突然涙があふれてきます。子どもたちは過去を振り返ると胸にこみあげるものがあり、あふれ出る涙なしには語るができないのです。

ストリート・チルドレンと 働く子どもたち

ネパール／バキスタン／エクアドル／バングラデシュ

世界の児童労働者数は2億1,500万人(5~17歳)。7人に1人(サハラ以南のアフリカでは4人に1人)の子どもが過酷な環境下での労働を強いられ、健全な発育や教育の機会を奪われています(*)。強制労働、債務労働、子ども兵士、人身売買、子ども売春・ポルノ、その他の危険・有害労働など労働の形態が悪質化し、深刻な問題となっています。※ILO.2010

ネパール「働く子どもたち」

背景

ネパールでは児童労働が深刻な問題です。多くの子どもが劣悪な環境下で働いており、そのほとんどが貧しい農家や少数民族の出身で、読み書きも十分にできない状況です。同プロジェクトでは、こうした働く子どもたちを暴力や搾取から守り、教育、職業訓練、娯楽、貯蓄などの機会を提供するとともに、法や政策の整備を政府に働きかけます。

今期の主な活動内容

- 最悪の児童労働形態からの子どもの救出と保護(501人)
- 奨学金の支給(556人) ■ ライフスキル教育の実施(299人)
- 補修教育プログラムの実施(289人) ■ 「貯蓄奨励制度」の実施(934人)

今回は、ラジオを利用した児童労働撲滅のためのキャンペーンを行いました。子どもたち自身が自らの問題を発信できるように、ラジオ番組制作のトレーニングを受け、メディアを通じて児童労働問題のメッセージを発信しました。

また、ピラトゥナガール、イタハリ、カマラマイの3地域では、以下の2点を明確にしました。①2016年までに、特に14歳未満の最悪の形態の児童労働をなくすこと。②2020年までに児童労働をなくすための戦略作りに着手し、それぞれ



補修教育プログラムに参加する子どもたち

の自治体が児童労働に関して「期限」を設定し、問題に取り組むこと。

プロジェクト対象すべての地域で「子どもの救出委員会」を立ち上げ、4カ月ごとにミーティングを実施。同委員会の活動により、特に14歳未満の子どもを労働を阻止することができました。さらに、子どもの年齢確認をするために雇用主を訪問

実施期間/2009年7月~2016年6月
実施地域/ネパール中部と東部(ヘタウダ、ピラトゥナガール、イタハリ-ダラン間ハイウェイ周辺、カマラマイ)
対象/子ども約6,800人



「子どもリソースセンター」の子どもたち。ここでは仲間と一緒に、安心して過ごすことができます

し、雇用主が子どもたちの出生登録書についてよく知り、雇用の際には年齢を確認するようになりました。

救出委員会によって241人の子どもたちが、働く子どもたちの保護を目的としたリソースセンターを訪れ、計1,792人もの子どもたちが「子どもクラブ」の活動や貯蓄、補習教育などのプログラムに参加したことも、今期の大きな成果として挙げるすることができます。



リソースセンターで壁新聞を作成する子どもたち

case study

Aさん「子どもクラブ」代表(女性)

現在7年生のAさんは、かつては家計を助けるために野菜売りをしていました。忙しくて学校に通えず、両親が喧嘩に巻き込まれて怪我をってしまうなど状況はさらに厳しくなり、自殺しかけたこともあったそうです。そんな時にプランの「HOPEプロジェクト」に出会い、カウンセリングを受けることに。奨学金をもらい、通学を続けられるようになったAさんは、児童労働について学び、子どもの保護に関するトレーニングや、将来のための貯蓄プロジェクトにも参加しています。ラジオプログラムでは子どもの権利のために、積極的に発言する姿も。成績は、53人のクラス中2番目。将来、医者になることを目標に、勉強を続けています。

Bさん「子どもクラブ」会計担当(女子)

「子どもクラブ」で会計を務めるBさんは、5歳の時に家事労働者(カマラリ)として売られ、5年間家事労働をしていました。が、預けられた1年後に奉公先の態度が激変。父親が難病に苦しんだ時にも、雇い主は実家へお見舞いに行くのを許してくれませんでした。その後、Bさんは「子どもクラブ」の存在を知り、カウンセリングを受けて雇い主と交渉の機会を得ます。そして、話し合いの末に、定期的に父親と会わせてもらうことと、1000ルピー程の給与をもらえるようになりました。現在は貯蓄プログラムにも参加し、貯蓄をしているBさん。「今も1年に1着しか服は買えませんが、幸せです」と話してくれました。

パキスタン

「家事使用人として働く女の子への教育・就学支援」

実施期間／2011年2月～2013年12月
実施地域／首都イスラマバード
対象／女の子316人

背景

首都イスラマバードでは、スラム出身の多くの女の子たちが、経済的な理由や社会的差別を理由に中途退学し、劣悪な条件で家事使用人として働いています。必要な知識と技術を身につけていないために就業機会は限られ、他の仕事に就くことができません。本プロジェクトでは、2年間で高校の卒業資格を得られる教育機会を提供するとともに、政府や労働機関への働きかけにより、家事使用人の労働条件の改善を目指します。

今期の主な活動内容

- 教師トレーニング(26人) ■就業支援のための適正検査(170人)
- 高等学校卒業の修了試験(234人) ■就業カウンセリング(160人)
- 職業訓練(39人) ■出生登録(31人) ■就業支援センターの設立(1カ所)
- 家事使用人の女性によるフォーラムの結成(10グループ200人)
- 家事使用人の女性対象の労働法と人権に関するオリエンテーション(220人)



受験用の書類を配る女性教師



女の子たちが描いた絵画

プロジェクト開始から2年を経て、いよいよ修了試験の時期を迎えました。これまで、当初284人の女の子が入学し、最大時で316人の女の子が学習センターに通い、結果2013年6月までに修了に至ったのは234人でした。

読み書きができない女の子たちが高校に相当するカリキュラムを修了するには、大変な努力が必要でした。後半に入ると時間が不足し、授業の進度を上げる必要があったため、短期間でカリキュラムを終えられるよう新しい教材を開発しました。教師たちは新たな教材の指導法に関する

トレーニングを受け、生徒たちは新しい授業とカリキュラムに必死でついていきました。

学習進度の遅い女の子たちへは別クラスを設け、数カ月遅れで修了試験を受けられるようにしました。

受験準備の段階で39人の女の子が出生登録されていないことが発覚し、急ぎ手続きを支援。最終的には234人が修了試験を受験し、184人が無事合格しました。不合格だった女の子たちは進度の遅い女の子たちとともに、数カ月後の追試験に挑戦する予定です。

また、同プロジェクトでは就業支援の強化にも力を入れ、167人の女の子に対して適正検査を行い、就業カウンセリングも実施。企業への就職が決まった修了生もいます。39人の修了生は、コンピューターと英語を学ぶための職業訓練を受けることができました。

さらに、家事使用人として働く

女性たちでグループを立ち上げ、関係者とともに労働条件の改善に向けた意識啓発活動を行いました。

学習センターに通えるようになった結果、読み書きを覚え、すばらしい詩や小説まで書けるようになった女の子や、就業カウンセリングによって新しい職を得ることができ、家事使用人としての仕事をやめた女の子もいるなど、この学習センターは確実に女の子たちの人生に変化を起こすことができました。



授業の様子。時おり笑顔が見られます

Staff's voice

担当スタッフより

安野麻衣 職員(支援者サポート部)



安野職員(左)とパキスタンの担当者

2012年9月、イスラマバードのスラム地区に設置した学習センターを訪ねました。スラム地区はたくさんの方が密集して暮らしているため、スペース確保が最初の難関だったそうです。センターは8畳ほどの部屋2つからなり、部屋と部屋の間には屋根すらなく、その日はちょうど大雨で水が入り込んでいました。机や椅子もなく、決して恵まれている環境ではないな、というのが正直な感想でした。

センターに着くと、27人の女の子たちが温かく出迎えてくれました。親の反対や経済的な事情で、彼女たちの多くは学校を中途退学させられたそうです。センターの様子を尋ねるとあちこちから手が挙がり、勉強できることがうれしい、自信がもてるようになったなど、満面の笑顔で話してくれました。学ぶ機会を失った彼女たちにとって、どんな環境であれ教育を受けることができて幸せだということが、痛い

ほど伝わりました。

特に印象的だった、2人の女の子との出会いもありました。1人目のハナは、最初から元気がありませんでした。聞くと、彼女は7年生で中途退学させられ、3年前に結婚した夫の勧めでこのプロジェクトに参加したそうです。今はセンターに近い夫の実家で暮らしていますが、義理の父親から、結婚した女性が教育を受ける必要はないと反対され、家を出るよう言われているため落ち込んでいたのです。涙ぐみながら状況を話してくれた彼女はなんと、クラスでトップの成績を修めています。

もう1人のハディジャもまた、女の子が教育を受けることに家族の理解がなく、3年生で中途退学させられた女の子です。彼女は結婚して5人の子の母となっていたある日、偶然プロジェクトのことを知り、参加することができたそうです。週6日の授業に参加するため毎朝4時に起きて家事・育児を両立させるのは大変だそうですが、センターに通ってからは、自分

の子どもたちより文字の読み書きができるようになったことが彼女のモチベーションに繋がっているのが、私にも手に取るようにわかりました。

空き時間におしゃべりに花を咲かせた女の子たちの様子は、日本のそれと変わりません。ですが、勉強や目標について尋ねるといきいきと熱を込めて語る姿に、教育を受けられることの楽しさ、喜びを改めて教えられました。

また、ほんの少しのきっかけで、未来を切り拓いていける女の子たちの無限の可能性を感じ、とても心を動かされました。彼女たちのように再びチャンスを得られる女の子が、パキスタン全体、そして世界中に増えていくことを願ってやみません。



コミュニティワーカーの女の子にインタビューする安野職員

THEIR STORIES

女の子たちの物語

さまざまな環境下にありながらも学び続ける女の子たち。プロジェクト地域から、うれしい2つのレポートが届きました。

story1 ファーザナさん

ファーザナさんはイスラマバードのスラムで父親と6人のきょうだいとともに暮らしています。10歳の時に母を亡くし、家は貧しく、とてもつらい子ども時代を過ごしました。きょうだいの中で唯一の働き手だった年長の姉が早くに結婚して家を出たので、家計は父の収入に頼っていました。

小学校4年生の時、ファーザナさんは中途退学し、働き始めました。家族の世話をするためにやむをえない選択でしたが、学校をやめたことをずっと後悔していたファーザナさん。友だちが楽しそうに学校へ通っているのを見ると、一層辛く、学校をやめたことは幼い心に深い傷となってずっと残りました。

それから数年経ったある日、彼女は読み書きができない大人のための学習セ



たくさんのきょうだいと暮らすファーザナさん(後列右端)

ンターのことを聞きました。そして、2011年7月18日、ファーザナさんは学習センターへの入学が認められ、以後熱心に勉強しました。どの先生も親切で、勉強がとても楽しかったので、彼女は家に帰っても勉強を続けました。

「最後のテストを終えた時の気持ちは口では表せません。入学から2年経った今、私はもはや読み書きのできない女性ではありません。いろんな種類の本が読めるし、手紙を書いたり、書類を作ることもできます。学習センターのおかげで、自分に自信を持つことができたのです。努力すれば、誰もが道を切り開ける—このような機会をくれたプランに心から感謝しています」。ファーザナさんは力強く語りました。

story2 サミーナさん

24歳のサミーナさんは、祖母と2人でパキスタン北部のマンセラ郡で暮らしていました。小学校を卒業しましたが、この町には女子校がなく、サミーナさんが男の子と一緒に勉強するのを父親が嫌がったため、彼女は泣く泣く進学を断念しました。

それでも勉強を続けたかったサミーナさん。彼女は中学校1年生の教科書を



サミーナさん(左)。祖母と

買い、その後も1人で勉強を続けました。そんな彼女に、家族は何もしてあげられませんでした。そうして6年から7年が過ぎ、サミーナさんは焦りを感じるようになりました。ひとりで学ぶには、やっぱり限界があるのです。

ちょうどその頃、イスラマバードで働いていた母親は学習センターが開設されることを知り、サミーナさんをイスラマバードに呼び寄せます。そうして、再び授業を受けられるようになったサミーナさん。勉強熱心な彼女はとても優秀で、最終試験の成績はなんと全体の3番目でした。

今、サミーナさんは明るい未来を信じています。学べる環境の下、努力を続けられれば、女の子にもたくさんの可能性が拓けるのです！学習センターの教師たちも皆、彼女の優秀さを認め、サミーナさんのこれからに期待しています。

エクアドル「働く子どもたち」

背景

首都に移住してきた貧しい先住民の子どもたちは、市場で物売りなどの低賃金労働に従事しています。彼らは性的搾取や差別の対象になりやすく、犯罪にも巻き込まれがちです。本プロジェクトでは児童労働をなくすよう保護者や行政に働きかけ、働く子どもたちが質の高い教育を受けられることを目指します。

今期の主な活動内容

- 子どもへの教育支援(363人)、奨学金支給(80人)
- 子ども対象のソーシャルスキルトレーニング(516人)
- レクリエーション活動(180人) ■保護者トレーニング(587人)、家庭訪問(80世帯)
- インフルエンザの予防接種支援(子ども70人とその親たち)



ブレイクダンスを通じた自己表現ワークショップ。子どもたちにとっては楽しい時間!

最終年となる今期は、キト市サンロケ地区で働く先住民の子どもたち全員が①何らかの教育をうける、②働くのをやめる、③働く時間を短縮する、のいずれかの状況に進めるよう支援を行って来ました。当初、最も難しかったのは、子どもたちが学校に戻っても授業に追いつけなかったり、そのために留年したり、学習意欲を失って、中途退学したりしたことでした。学習進度に合わせて指導できるように、教師トレーニングを継続的に実施。定期的なモニタリングの結果、現在、支援対象の約98%の子どもたちが学校に通って

実施期間/2010年4月~2013年10月
実施地域/首都キト市内サンロケ地区
対象/キトに移住してきた先住民の子どもたち約2,400人

参加者の声

ゾイラさん(15歳)

「先生たちはとてもよく教えてくれます。美容院で働いていましたが、以前学校をやめたのが気がかりだったので、これを機会に学校に戻ることにしました。悔いのないように一生懸命勉強したいです」

ます。さらに、保護者と児童労働に関する問題について話し合ったり、保護者への職業訓練や識字教育の実施により世帯収入の向上を目指すとともに、子どもを学校に通わせるように働きかけました。キト市政府からこれまでの活動を高く評価され、エクアドルの「子どもの日」である6月1日のイベントにNGOとして唯一参加。さらに国レベルでは、労働省の主導による児童労働根絶のための具体的な計画作りの場に参画するなど、これまでの活動が自治体、国レベルでも継続できる土台作りも行うことができました。

バングラデシュ「ストリート・チルドレン」

背景

首都ダッカでは、多くの子どもたちが十分な食事を得ることもできずに不衛生な路上で生活しています。教育の機会を奪われ、劣悪な環境で働き、性的搾取や身体的虐待を受けている子どももいます。本プロジェクトでは、「働く子どものセンター」で安全な生活の場を提供するとともに、地域への意識啓発活動を通じて関係者の理解を深めました。

今期の主な活動内容

- 「働く子どものセンター」運営(利用者1,708人) ■夜間シェルターの設置・運営(利用者703人)
- 職業訓練・雇用機会の提供(375人) ■カウンセリング(1,056人)
- 医療支援(延べ809人) ■栄養価の高い食事の提供(延べ703人)
- 「貯蓄プログラムの実施(562人) ■個人データの整備(1,708人) ■出生登録(924人)

活動最終年の今期は、年間約1,700人のストリート・チルドレンが7カ所の「働く子どものセンター」を利用し、様々な活動に参加することができました。特に、健康に関する意識啓発活動や医療サービスの提供では、実際に高熱を出す子どもや赤痢に罹患する子どもの数が減少するなど、効果がみられました。さらに、この1年間で924人が出生登録を行ったほか、一人ひとりの状況をよりよく把握するための個人データが整備され、緊急事態に備える体制が整いました。また、子どもたちも積極的に地域イベントに参加し、演劇

や歌を通じて自分たちの現状を訴えました。このプロジェクトに参加し、子どもたちは自分自身に誇りを持ち、能力を高めることができました。職業訓練を受け、安全な形態での労働による収入増加が実現した子どもたちもいます。さらに、これまでの活動で地域の理解を得ることができたのも大きな収穫です。地元自治体や警察、さらに影響力のある地元の有力者たちが関連イベントに積極的に協力し、具体的に子どもたちの雇用先を紹介する人もいました。プランは本プロジェクトをパートナー団体や自治体政府と協力しな

実施期間/2007年7月~2013年6月
実施地域/首都ダッカ市とその周辺
対象/ストリート・チルドレン年間約1,700人



「働く子どものセンター」から小学校に通う女の子たち

参加者の声

ムクタさん

「センターでは、食事までできて、トイレや手洗い場も使い、シャワーを浴びることもできます。夜はいろんなゲームをして遊んでいます。今ではとても清潔に暮らしています」

がら進めてきましたが、今後は自治体政府と民間団体がこれまで培った経験を活かし、引き続き子どもたちへの支援を実施する予定です。

紛争や災害に巻き込まれる子どもたち

ミャンマー/ベトナム
タイ(プラン・アジア地域統括事務所)

10億人以上の子どもが武力紛争下の国や地域で暮らしています(UNICEF, 2009)。多発する紛争によって多くの子どもたちの命が奪われ、親を失い、戦闘や強制労働に駆り出されたり搾取や虐待にあっています。教育や保健といった基本サービスを受けられないなど極めて有害な影響を受けています。記録的な大雨による洪水や土砂災害、火山噴火や地震・津波の増加も子どもたちの日常生活や学校教育に大きな影響を及ぼしています。

「ASEAN・災害に強い学校」イニシアチブ

背景

過去10年に世界で自然災害の影響を受けた人の約90%、亡くなった人の約80%がアジア地域の人々です。ASEAN(東南アジア諸国連合)加盟国だけでも、小学校に通う年齢の子ども1億人以上が、自然災害の影響を受けやすい地域に住み、1日の多くの時間を学校で過ごしています。ミャンマーやベトナムも毎年のようにサイクロンや台風による大きな被害を受けていますが、学校における防災対策は、いまだに取り組みが遅れています。

今期の主な活動内容

- 「ASEAN・災害に強い学校」立ち上げワークショップ



暴風で屋根が吹き飛んだ校舎(ベトナム)

プラン・アジア地域統括事務所(略称: ARO)は、2012年11月よりASEAN各国の教育省や防災担当行政官、パートナー団体関係者、地域住民などに聞き取り調査を行い、災害が学校に通う子どもたちに及ぼす影響に関する情報収集を行ってきました。この結果に基づき、AROは2013年6月に「ASEAN・災害に強い学校」立ち上げワークショップを開催。関係者と

今後の具体的な計画について協議し、ミャンマー・ベトナムについては、以下の活動を行うことで合意しました。

- ・「ASEAN・災害に強い学校」ガイドラインの策定と加盟国への配布(ASEAN共通)
- ・既存の校舎・教室の安全性評価(計50校を予定)と安全性評価マニュアルの策定
- ・台風や洪水に強い学校モデルの確立と校舎の再建・修繕(計9校を予定)および給水・衛生設備の整備
- ・学校防災計画の策定と防災訓練および防災キットの配布
- ・関係者の能力強化
- ・防災意識の啓発

実施期間/2013年5月~2015年6月
実施地域/ミャンマー西部ラカイン州、ベトナム中部クアンビン省、タイ
対象/実施地域の住民4,910人(子ども3,800人、教師125人含む)



「ASEAN災害に強い学校」立ち上げワークショップの様子

今後は、ASEAN各国の知識や経験を集約し、連携してミャンマー、ベトナムへの支援を実施。子どもたちが学校で安心して学習できる環境作りを推進します。



雨や風を防ぐための覆いがない教室(ミャンマー)

Staff's voice 担当スタッフより

内山雄太 職員(プログラム部)

災害は子どもたちの心に大きな傷跡を残します。災害後も恐怖心が持続し、夢に見てうなされたり、起きていた時にも突然思い出して、授業に集中できなくなります。授業についていけなくなると将来を悲観し始め、学校をやめてしまうケースもあります。教育は子どもたちの健康と発展の基礎を築くための出発点であり、学んだ知識は、将来、貧困や社会的に不利な立場から抜け出し、力強く生きていくための知恵として生かされます。子どもたちの学校教育を中断させず、安心して学習できる環境を作るためには、災害に強い堅固な校舎への建て替えや、防災教育が大切です。



粗末な作りの幼稚園と園児たち(ベトナム)

これまで世界の防災に対する関心は、必ずしも高いものではありませんでした。「国連ミレニアム開発目標」(2015年までの途上国開発目標)にも防災は含まれていません。しかし、スマトラ島沖地震(2004年)や東日本大震災(2011年)などの大災害を契機としてその重要性が見直され、国際社

会全体で取り組むべき問題として認識され始めています。日本の外務省によると、2016年以降の新たな途上国開発目標である「持続可能な開発目標」(現在、日本を含む国連加盟30カ国で検討中)には、今度こそ防災が含まれることになるそうです。「災害に強い学校」はASEAN防災戦略の優先課題であり、プランはその事務局としてパートナー団体の取りまとめ役を担い、イニシアチブを牽引しています。2015年3月には仙台で第3回国連防災世界会議が開催されることが決まりました。本会議では2016年以降の世界の防災戦略について協議されますが、プランは、ASEANで災害に強い学校モデル作りを主導する団体として、いち早くその経験を関係者と共有し、世界の防災対策に貢献していきます。

HIVとエイズに苦しむ子どもたち

モザンビーク

HIVに感染している15歳未満の子どもは、世界に約340万人。毎年39万人の子どもが新たにHIVに感染しており、その多くは母子感染によるものです。また、年間25万人の子どもがエイズ関連の病気で命を落としています。およそ1,710万人がエイズにより親を失い、過酷な状況にある子どもたちの保護が大きな課題となっています(※)。※WHO/UNAIDS/UNICEF.2011

モザンビーク「エイズ孤児の保護とケア」

背景

世界10位に入る高いHIV感染率を示すモザンビークにおいて、現在HIVとともに生きる子どもの数は約9万9,000人にも達しています。毎日100人以上の子どもが新たに感染している状況です。エイズ孤児には児童労働や中途退学、早すぎる結婚といった問題も伴うため、改善が必要です。

主な活動内容

- 学用品キット・制服の支給(2,000人) ■ HIV検査の実施(805人)
- HIVとともに生きる子ども・家族への健康相談(計418人)
- 意識啓発 ■ 養鶏業による生計向上支援



学用品や制服を支給されて喜ぶ子どもたちと保護者

4年間に及ぶプロジェクトが無事終了しました。今期は地域ボランティアや、地域リーダーからなる子どもの保護委員会メンバーたちの能力強化を推進。彼らはHIVとともに生きる子どもたちへの虐待のケースを見つけ、自分たち自身で問題を解決できるようになってきました。

また、市場、学校、保健所、教会などで子どもの保護や権利に関する啓発キャンペーンを行ったことで差別や偏見が減り、虐待のケースが減少し始めています。「世界子どもの日」や「世界エイズデー」には健康フェアを開催。HIV検査も実施しました。

本プロジェクトでは、HIVとともに生きる人々の支援グループメンバー(ほとんどがHIV陽性)の活動も支援。彼らはHIVとともに生きる子どもとその家族に対して健康相談を行い、抗エイズ薬服用のメリットを説明することで治療の継続を推進しました。

また、貧困世帯のエイズ孤児には、学用品や制服を支給。子どもたちの学習意欲を継続させることで、中途退学を防止することができました。

エイズ孤児のケアを行う女性グループ

実施期間/2009年7月~2013年6月
実施地域/南東部イニャンバネ州ジャンガモ地区
対象/HIVとエイズの影響を受けている子ども約5,000人



養鶏トレーニングを受ける女性グループメンバー

ベラミノ・カルロスさん 参加者の声 (農業組合長)

「野菜栽培で収入を得た世帯は、衣類やブランケットを購入し、家を修繕することもできました。これで安心して冬を迎えることができます」

には、起業(養豚業、養鶏業、農業)による生計向上を支援。生産物を市場で売り、収入を得た世帯も出始めています。



抗エイズ薬で治療中の子どもと保護者

ました。その後男性6名も加わり、メンバーは計13名に。彼らは養鶏組合を結成して養鶏業を営み、収入を得られるようになりました。「政府は、社会的に不利な立場に置かれている私たちの境遇を理解し、養鶏業のための土地を提供してくれました。私たちの活動が実を結び、政府を動かすことができたのです」とは養鶏組合長、イサベル・ホセさんのコメント。

組合職員のジュリア・ロンベさんは、苦労話を聞かせてくれました。「私たちの多くは養鶏の経験など全くなく、最初は苦労の連続でした。鶏小屋も自分たちで建てなければなりませんでしたが、やはりヒヨコの世話が一番大変でした。盗難防止のために鶏小屋で眠ったこともあります。でも、努力は無駄ではありませんでした。養鶏業で暮らし向きがよくなったことが何よりの証拠です」。

養鶏により120人のエイズ孤児を含む計80世帯住民の生計が向上し、子どもたちの栄養状態も改善しました。ジャンガモでは、今後、養鶏業の拡大によりプロジェクトの参加者を増やすことを検討しています。

case study

養鶏業で生計向上&栄養状態改善

ジャンガモ地区の多くの土地は痩せており、洪水で土壌が浸食され、農作物の収穫も不安定です。農村なので雇用の機会も限られ、HIVとともに生きる人々がいる貧困世帯では食糧確保も難しいのが現状です。

この状況を改善するため、本プロジェクトは、2011年2月より



プロジェクトに参加し、養鶏を営む女性

障がいのある子どもたち

インド/グアテマラ

世界ではおよそ9,500万人の子ども(0~14歳)が障がいを持っていると見積もられています(WHO,2011)。障がいのある子どもたちは、基本的な医療サービスや社会サービスが不足しているために、適切な治療やケアを受けることができません。また、周囲の理解がないために差別や虐待にあいやすいことも問題となっています。

インド「障がいのある子どもたち」

背景

首都デリーでは、約24万人の子どもたちに障がいがあり、その多くは適切な治療を受けることができていません。本プロジェクトでは、2008年8月から2012年6月に実施した第1フェーズの経験をもとに、新たにデリー北部の19地域での支援を開始。8つの障がい児センターにおいて教育の機会を提供していきます。

今期の主な活動内容

- 「障がい児センター」の設置(新たに2カ所)
- リハビリテーション・治療の実施(362人) ■ フォローアップセッション(1,968回)
- 保護者・地域住民の能力強化(保護者105人・コミュニティボランティア20人)
- 政府・関係機関との連携強化(611人が公共の福祉サービス享受)

コミュニティボランティアの多くは障がいのある子どもの保護者から選ばれ、家庭で持続的にできるリハビリテーション



「障がい児センター」でリハビリを受ける子ども

や理学療法について学びます。最初は知識がなかったボランティアたちも、継続的なトレーニングにより、今ではコミュニティにおける障がい者支援の重要な人材として活躍しています。障がい児センターに通うための交通費を捻出できない貧困家庭にとっては、家庭内でできるケアを伝授してくれるボランティアは貴重な存在。障がい者をもち地域から差別を受けていた人々が、ボランティアとして社会に参画できるようになったことは、大きな成果です。また、フェーズ1より進めてきた障

グアテマラ「障がいのある子どもたちの支援体制作り」

背景

グアテマラでは約700万人の子どもに障がいがありますが、偏見や差別が根強く、彼らの多くが地域社会から隔離され、適切なケアを受けられずにいます。そこで、地域住民への能力強化や意識啓発などを通じ、コミュニティによる支援体制を構築します。

今期の主な活動内容

- 障がいのある子どもの特定(270人) ■ 「障がい児センター」の設置準備(9カ所)
- 障がいのある子どもとない子ども942人(障がいのある子ども19人)へのトレーニング
- 関連団体との連携強化 ■ 意識啓発教材とラジオ広告(6点)を製作

障がいのある赤ちゃん

ヘンリーさんは生後11カ月の男の子です。生まれつきの障がい、自分で頭を支えることも座ることもできませんが、これまで治療を受けたことはありませんでした。彼の家族は貧しく、息子に治療を受けさせるという選択肢がなかったのです。ヘンリーさんはこのプロジェクトの支援対象者として特定されたことで、今後は、地域に設置される「障がい児センター」で適切な治療を受けることができるようになりました。

case study

プロジェクト1年目では、障がいのある子どもたちを特定することが何よりも重要です。彼らの多くは偏見や差別により社会から隔離され、なかには保護者が彼らを差別し、家庭内に隠してしまう場合も多いからです。本プロジェクトでは、地域に精通しているコミュニティリーダーが中心となって家庭訪問を行い、家族とよく話し合い、270人の障がいのある子どもを特定することができました。今後、彼らはコミュニティに設置される「障がい児センター」を通じて、一人ひとりの症状に

実施予定期間/2012年7月~2015年6月(第2フェーズ)
実施地域/デリー市内北部の19地域
対象/障がいのある子ども約600人と地域の人々225,000人

リーハンさん(8歳)

リーハンさんは知能障がいを伴った痙性脳性まひで、以前は自分の首を支えて座ることができませんでした。しかし、コミュニティボランティアとの出会いにより、「障がい児センター」でトレーニングを受け、1年間のリハビリを経て、自力で座ることができるようになりました。センターでは障がい者のための社会サービスがあることなども教わり、無料の鉄道サービスを利用できるようにもなりました。彼は、定期的にセンターに通えることをとてもうれしく思っています。

case study

がいのある子どもたちへの就学支援により、これまでに84人が公立学校へ入学しています。障がいのある子どもを特別な施設ではなく地域の学校に溶け込ませることで、彼らへの理解が深まり、偏見・差別を軽減することが今後期待されます。

実施予定期間/2013年1月~2015年1月
実施地域/東部イサバル県、モラーレス市、ロス・アマテス市、計30コミュニティ
対象/障がいのある子ども約300人と保護者、地域住民、行政リーダー、保健・教育・社会福祉分野の職員



目かくしをするゲームを通じて障がいについて学ぶ子どもたち

合わせた適切な支援を受けていきます。障がいのない子どもたちに対してもトレーニングを行い、障がいに関する知識や偏見、差別を取り除くことの重要性を伝えました。今後もこうしたトレーニングを継続的に行い、学校やコミュニティで子どもたちがリーダーとなり、障がいのある子どもたちを支えていける社会を目指していきます。

虐待される子どもたち

子どもの虐待の多くが人目に触れないかたちで行われ、報告されることがないためその実態を把握することは困難です。しかし、毎年5億人から15億人の子どもが暴力を経験していると推定されています(※)。身体的虐待、心理的虐待、性的虐待、ネグレクト(育児放棄)と、その内容もさまざまです。強制労働や性的搾取を目的とした人身売買も年々低年齢化しており、数多くの子どもが被害にあっています。※UNICEF,2009

バングラデシュ／カメルーン

バングラデシュ「子どもの虐待防止」

背景

実施地域の子どもたちは、虐待や労働、性的搾取、人身売買など多くの危険にさらされています。収入を求めて農村から都市部へ来た子どもたちは、一層危険な環境下で毎日過ごしています。本プロジェクトでは、虐待を受けた子どもの保護とケア、法的サービスの提供、社会復帰支援などを行ってきました。

主な活動内容

- カウンセリング(計984人) ■ 子どもの保護とシェルターへの受け入れ(計107人)
- 虐待の事実を確認した子ども(計337人)と裁判まで持ち込んだケース(計202件)
- 子どもの権利保護関連法に関する啓発キャンペーン(計252回)
- 関係者のトレーニング(計24回) ■ 悩み受付相談サービス(計1,850人)

これまで子どもの虐待は他の大きな社会犯罪の影に隠れ、また、デリケートな問題であることから、取り上げられることはまれでした。しかし、プロジェクト活動を



子どもの権利保護に関する啓発セッション

通じて地域住民は子どもの権利保護の大切さを認識するようになり、被害にあった子どもたちも声を上げ始め、法的支援を受けて裁判まで持ち込むケースも増えてきました。一方で課題もあります。法的手続きに時間がかかりすぎ、虐待目撃者の正確な証言を得るのが難しかったり、被害にあった子どもの保護者の中には、訴訟に消極的で、示談で済ませてしまうケースもあります。3年にわたるプロジェクトは終了しましたが、今後も虐待問題の根本的な解決に向けて関係者間の連

カメルーン「弱い立場にある子どもの支援と保護」

背景

カメルーン北西地域では心の状態が不安定な子どもの多いことが、調査により明らかになりました。これは、性的虐待や家庭内暴力、貧困とともに、この地域がカメルーン国内でもっともHIV感染率が高く(9%)、多くの子どもが親や親戚を失っていることと関係があります。

主な活動内容

- 子どもの権利保護に関する啓発キャンペーン(計50回)
- 子どもの権利保護に関する研修(計1,110人) ■ 教材・学用品支給(691人)
- 医療サービス(691人) ■ 出生登録証発行(632人) ■ カウンセリングと心のケア(536人)
- 職業訓練(137人) ■ 関係行政機関への支援(文房具、啓発用Tシャツなどの支給)

プロジェクト開始から約2年半が経過。これまで暴力や虐待を受けた子どもたち計2,107人に支援が届き、彼らは新しい

生活をスタートさせています。特に教育面での効果が現れ始め、心のケアや教材・学用品の支給により、子どもたちは自信と学習意欲を取り戻し、中途退学率も減少しています。学習成績も向上し、実施4地域のうち2地域では、卒業試験の合格率がそれぞれ97%、92%と格段に伸びました。また、出生登録証の発

参加者の声

ステファニーさん(10歳・女の子)

「以前は教材や学用品を持っていなかったもので、週に1~2回しか学校に行かず、学校でもじゃま者扱いされていました。でも、支援によって教材と学用品をもらい、毎日学校に通えるようになりました。これからはたくさん勉強して、将来は教師になりたいです」

実施期間／2010年5月~2013年6月
実施地域／首都ダッカ、北部および南部の計6地域
対象／ストリート・チルドレンを含めた子ども年間約1,400人

ラヌさん(仮名・17歳)

case study

継母に虐待されて家を飛び出し、職を求めてダッカにやってきたラヌさんは、知り合った女の子の口利きで、衣料品縫製工場で働くことになりました。ある日、女の子に郊外へと連れ出されたラヌさんは、女の子の知り合いの男にレイプされてしまいました。この事実を確認したバングラデシュ女性弁護士協会(プロジェクトのパートナー団体)は、ラヌさんをシェルターに保護。その後、彼女は心のケアや刺繍の職業訓練を受け、現在は洋服仕立業の職を得て元気に生活しています。ラヌさんのケースのように、協会は常に子どもの虐待に目を光らせ、迅速な保護活動を推進しています。

携をさらに強化するとともに、法的手続きの迅速化を訴えています。

実施期間／2011年1月~2014年12月
実施地域／北西部バメンダ活動地域
対象／エイズ孤児や虐待を受けた子どもなど約2,600人



「子どもの権利保護に関する研修」に参加した子どもたち

行により社会サービスへのアクセスが可能になりました。子どもの権利保護に関する啓発活動を通じて、保護者や教師、地域住民の行動にも変化が見られました。彼らは子どもたちと対話をするようになり、家庭内暴力や学校での体罰も減ってきています。また、協力して虐待のケースを摘発し、多くの性犯罪者を立件することができました。

THANK YOU MESSAGES

~編集後記~

いつも温かいご支援をありがとうございます。

おかげさまで今期もさまざまな国の子どもたちへ、支援の手が届き、成果を上げることができました。

担当者一同、心よりお礼申し上げます!



寺田聡子(プログラム部)



「『児童労働』と『働く子どもたち』を担当しています。今回は、児童労働の専門家、理事でもある長坂先生のネパールでのプロジェクト視察記事を掲載しています。マンスリー・サポーターの皆さまの貴重なご寄付で、プランがどのような活動を展開し、子どもたちにどのような変化が起きているのかを、専門家の立場でわかりやすく説明していただきました。先生のお気持ちのこもったレポート、ぜひご一読ください。これからもできるかぎり皆さまの期待に応えられるような、よい報告書を目指して担当者一同努力していきたいと思えます。温かいご支援のほど、よろしくお願いたします」

「私の唯一の心の支えだった祖母が亡くなった時、絶望的な気持ちになり、もう学校には来れないと思えました。でも、学用品の支給や心のケア、そして授業料まで負担していただき、これで勉強を続けられます。本当にありがとうございました」

(ジュリエッタさん(仮名)、カメルーンの小学生の女の子)



富田佳代(プログラム部)



「今年4月からプラン・マンスリー・サポーターのプロジェクトを担当させていただくことになりました。報告書(2013年秋号)を執筆するにあたり、現地から届く多くの喜びの声を確認することができました。プラン・マンスリー・サポーターという支援を通じて、困難な状況から立ち上がる力を持つ子どもたちの大きな可能性を痛感しております。継続的に子どもたちの可能性を支えてくださる皆さまに、心から感謝を申し上げます。今後、現地出張などを通じて、報告書を受け取られる皆さまが、より現地の状況を感じることができるよう報告に努めてまいります。引き続きの温かいご支援を、どうぞよろしくお願いいたします」

「プランの支援を通じて、息子に理学療法を受けさせることができるようになりました。これからも、息子と一緒に安心して生活できます。本当にありがとうございました!」

(脳性麻痺をもつインドの2才の男の子・ラメッシュさんの両親)



内山雄太(プログラム部)



「2013年春号では、ご報告しなければならないプロジェクトのいくつかを私が現地で見てきたということもありますが、原稿をたくさん書かせようとする同僚の陰謀もあり(笑)、露出が多くなってしまいました。今回は執筆者のバランスもとれていると思います。プラン・マンスリー・サポーター報告書では、途上国の子どもたちが直面している社会問題の“現場”が目につくような内容をお届けできればと鋭意努力しておりますが、皆さまに伝わっているでしょうか。ご意見、ご要望(ご批判も)などあれば、ぜひお寄せください。今後の反省材料とさせていただきます。今後ともプラン・マンスリー・サポーターへのご支援を、どうぞよろしくお願いいたします」

「学用品をいただいて勉強への意欲が一層沸きました。成績もクラスで4番だったのが、ついに1番になりました! 本当にありがとうございました」

(エミリエンさん(仮名)、カメルーンの中学生の女の子)



「プランのスタッフの支援を受け、息子とともに、コミュニティに溶け込むことができました。皆さんの支援は、私たちにとって心強いです!」

(障がいをもつグアテマラの4才の男の子・フランクリンさんの家族)



2013年度

プラン・マンスリー・サポーター収支

(2012年7月～2013年6月)

マンスリー・サポーター年度末数: 16,101人

(単位:円)

収入	寄付金	372,283,000
	収入合計	372,283,000

カテゴリー	国	プロジェクト名	
ストリート・チルドレンと働く子どもたち	ネパール	働く子どもたち	8,221,680
	バングラデシュ	ストリート・チルドレン	17,730,040
	エクアドル	働く子どもたち	12,976,240
	パキスタン	家事使用人として働く女の子への教育・就業支援	2,811,240
	エジプト	ストリート・チルドレン	6,640,120
障がいのある子どもたち	インド	障がいのある子どもたち	3,776,440
	トーゴ	障がいのある子どもたちの支援体制づくり	44,366,520
	グアテマラ	障がいのある子どもたちの支援体制づくり	15,070,800
HIVとエイズに苦しむ子どもたち	モザンビーク	エイズ孤児の保護とケア	370,120
	インド	子どもと女性を中心としたHIV予防とケア	24,761,560
	カメルーン	子どもと女性を中心としたHIV予防とケア	29,076,840
紛争や災害に巻き込まれる子どもたち	アジア3カ国 [ミャンマー/ベトナム/タイ]	ASEAN「災害に強い学校」イニシアチブ	33,595,040
	スリランカ	子どもの保護とケア及び地域社会への復帰支援	8,124,400
	南スーダン	若者への就職・起業支援	35,663,000
虐待される子どもたち	スリランカ	家庭・学校・地域での暴力防止	21,237,440
	バングラデシュ	子どもの虐待防止	10,253,920
	カメルーン	弱い立場にある子どもの支援と保護	8,949,000
日本国内活動費用			89,564,760
支出合計			373,189,160

当期収支差額	-906,160
前期繰越収支差額	48,273,160
次期繰越収支差額	47,367,000



ご質問やご意見などございましたら、下記担当までご連絡ください。

公益財団法人プラン・ジャパン

〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル11F
 TEL: 03-5481-0030 FAX: 03-5481-6200
 www.plan-japan.org